

第1回 人権研修会

— 病気の子どもの権利について —

人権教育推進委員会

1 はじめに

今年度1回目の人権研修会は、病気の子どもに対する人権意識を高めることを目的として行った。(写真)

2 概要

日 時 令和7年7月22日(火) 10:30~12:00
場 所 本校2階多目的ホール
講 師 昭和医科大学教授 副島 賢和 様
対 象 当校教員
テーマ 病気の子どもの権利について
「学ぶことは生きること
～回復・成長に必要なS・C・H」



3 内容

講師の先生のご経験を踏まえた講義内容であり、提示されたワークシートを活用しながら、参加者同士が意見交換を行う場面もあった。その中で、自ら考えを深めることができる、学びの多い講義だった。

(1) コロナ禍のあとの子どもたちの気持ち

新型コロナウイルス感染症の流行後、自ら命を絶つ子どもの数が増えている。なぜ増えているのか。この5年間、コロナウイルスから命を守るために、「人と関わらないように」「密になるから」「一緒に給食を食べない」など、「(感染のリスクがあるため)人と関わることは危ない」と教えられ続けた。この時の気持ちが消えない子どもたちがおり、人と関わるのが怖いと感じている子どもたちがいる。そのため、人との距離感がつかみにくく、「助けて」と言えない子どもが増えている。その結果、「ひとりぼっち」「こんな自分はダメな存在」と感じる状況が出てきた。

(2) 病気を抱える子どもたちの気持ちを考える(ワークシート)

提示されたワークシートを用いて、子どもたちの気持ちについて考え、その内容を隣の参加者と情報交換した。多様な意見が出され、より良い意見交換の場となった。講師の先生が、現場で子どもたちから直接聞いた言葉を紹介してくださり、子どもたちが抱える不安や葛藤をより身近に感じる事ができた。例として以下のような言葉をご紹介くださり、子どもたちの思いを具体的に知ることができた。「ポテトチップス全部食べてみたい(塩分制限があるから食べられない)」「海外旅行に行ってみたい(機械がついているからだめ)」「なんでこんな体に生まれたのか」「病気を抱える私たちに教育は必要ですか」と否定的な気持ち、逆に「病気をしたことが自分の誇り」「この経験をしなかったら今の自分はいなかった」と肯定的な気持ちをもつ子どもたちもいることを知ることができた。

II 校内研修

(3) 病気の子どもたちが置かれている状況

講師の先生が出演されている TV 番組の動画を視聴し、その内容を踏まえて、院内学級の果たす役割について、講師先生がお話してくださった。院内学級の役割は、「勉強の遅れをカバーすること」「子どもたちの心を解きほぐすこと」である。院内における子どもたちの最優先は治療であり、子どもたちは 24 時間、受け身の姿勢を求められている。自分で選択したり、決定したりする機会がほとんどない。だからこそ、院内学級では「自分で選ぶ」「自分で決める」体験を丁寧に積み重ねることが重要である。そのような経験が自己選択観・自己決定観を育み、自尊感情へとつながっていく。そして、基礎的な自尊感情が育っていれば、多少の困難があっても立ち直る力につながる。

(4) 病気の子どもたちにどう寄り添うか

多くの喪失体験を経たことで、自分を大切に思えない子どもたちがいる。しかし、「こんな自分でもいいのかな」と思える経験を積むことで、少しずつ自己肯定感が育まれる。そのためにも「あなたはあなたのままでいい」というメッセージを、日々丁寧に伝え続けていくことが重要であると学んだ。

病気の子どもと関わる際には、「今」感じている気持ちを大切にすることが重要である。「おいしいな」「おもしろいな」といった、日常の中の小さな喜びや心の動きを一緒に味わい、肯定していく関わりが、子どもたちの心を支える力になる。子どもが「痛い」と言った時に「痛くないよ」と否定するのは、その子の感じている現実を否定することになる。すると子どもは「自分が悪いんだ」「我慢しなきゃ」と思い込み、自己否定につながってしまう。だから大切なのは、「痛いよね」「つらいよね」「怖かったよね」とその子の感情を代弁し、言語化してあげること。感情は、繰り返し言葉にしてもらうことで少しずつ自分で言葉にできるようになっていく。また、子どもが「死にたい」と言った時も同じで、その言葉をそのまま否定するのではなく、「死にたくなるほど辛かったんだね」とその奥にある気持ちに寄り添うことが大切。どんな感情も、願いを伝えるための大事なサイン。「どんな感情も持っていいんだよ」という安心感を伝えながら、気持ち自体は受け入れる（受容）けれど、行動までは許す（許容）ことはしない、という大切な線引きが必要。

4 事後アンケートから（感想や意見）

- ・子どもたちの気持ちを第一に考えて実践されているお話は、共感すること、勉強になることばかりでした。やはり教員は、授業力が大事であることを再確認できました。
- ・現在担当している児童やこれまで担当していた児童のことが思い浮かび、これからの児童との関わりを見直す機会となりました。
- ・一人ひとり違う子どもの実態を踏まえた言葉かけが大事だということをあらためて実感することができました。
- ・日頃大事にしていることに背中を押していただけた気がします。また今までとは違う視点や糧にしていける視点やポイントを教えていただき、今後に生かしていきたいと思います。
- ・先生が出会った子どもたちの言葉から、ご自身の体験として学んだことを自分のお言葉としてお話してくださり、心に響きました。
- ・副島先生の教育への情熱、エネルギーを感じました。心の教育とは何だろう・・・と考えるよい機会になりました。